
『双子似』 【掌編・文学】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『双子似』 【掌編・文学】

【Nコード】

N5108Q

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

私を見たという人がある。でも私にはその記憶がない。
そんなある日、自分と似た彼女の存在を知る。

『双子似』作…山田文公社

身の回りでおかしな事が起き始めた。それは私を見たと言う人が増えたのだ。私の記憶が無いのにもかかわらず、会ったとか、見たと言った事を頻繁に言われるようになった。

特に怖いと感じたのは、見ず知らずの人が、やたらと親しげに話しかけてきた時だった。私が知らないと言っても、相手は不思議な顔をするばかりで、私の話をいっこうに信用してくれず、相手はしきりに会った場所や内容を語り説明しているのだが、私はその人もその出来事も全く知らないのだ。私は自分の記憶だけが抜け落ちているんじゃないかと、不安にかられる時もあった。

そんな事が続いたある日、私は彼女存在を確認できる事ができた。

「エリちゃんでしょ？ ネット見たよ」

いかにも遊んでいるような、軽い感じの男が駅構内でいきなり話しかけてきた。私は彼の事を全く知らないし、ネットと言われても心辺りがない。

「人違いじゃありませんか？」

私が怪訝な顔をして尋ねると、男は携帯を取り出してなにやら操作し始めた。そしてしばらくして、携帯を私の方へと向けて見せた。

「ほら、これ、エリちゃんでしょ？ 俺ここでコメントしているシユウジ」

そう言い携帯の画面を指さして見せている。私は目を細めて携帯をのぞき込んだ。そこには確かに自分そっくりな女性が、可愛いらしいポーズを決めて写っている。

「あの、これなんていうサイトですか？」

その質問に男は驚きながら、答えた。

「え、プログラスタ……だけど、本当にエリちゃんじゃないの？」
私は男の質問に頷いた。

「あ、なんかすいませんでした」

男は携帯をポケットに入れて、頭の後ろに手を当てながら、ゆっくりと頭を下げた。

「いえ、最近よく誰かと間違われるので……プログラスタ？　でし
たっけ、先ほどのサイト」

私が尋ねると男は、数回かるく頷いて答えた。

「そうです、いや本当にすいませんでした」

男はそう言い、また深く頭を下げて駅のホームへと向かって行った。私はさっそく携帯を取り出して検索して“プログラスタ”を探した。どうやらSNSソーシャル・ネットワーク・サービスのようで、ブログや同じ趣味の同士で集まるコミュニティを形成する、ごく一般的なサイトのようだった。

私は会社に向かう迄に手早く登録を済ませて、サイト内で先ほど見た“エリ”と言う自分に似た女性を捜す事にした。検索するとすぐに見つかった。エリはいろいろな写真を載せていた。それは普通のものから、多少過激なものまでと広く載せていたが、そのどれを見ても確かに自分にそっくりなのだ。

「なにこれ……」

あまりに似ていて気味が悪くなった。記事の内容は二、三行ほどで、そのときの気分などや、出来事が短く書かれていた。そして記事内には、ときどき自分のよく知った生活圏の所在地名がでてくる。つまり彼女は私と同じ地域に住んでいる。間違われている理由がわかると、私は自然と彼女に興味が沸きはじめ、少しずつ恐怖感も薄らいでいった。

そんなに似ているなら一度会って見たい……と私は考えた。程なくしてその機会は訪れることになった。

会社から帰る道に交通量の多い道路で、大柄の男が突然現れて、

私の腕を捕まえて引っ張り始めた。

「ちょっと来いよ！」

「止めてください！」

私は男から慌てて逃げようとしたが、男は大声で怒鳴って捕まえている手に力をこめた。

「いいから来い！」

男は乱暴に私の腕を掴んで車へと引っ張っていく。

「乗れ！ はやく乗れ！」

「ちょっと、警察呼びますよ」

私の抗議に男の動きが一瞬止まり。

「何だと、コラ？」

男はポケットからナイフを取り出して、刃先を私に向けて行った。
「痛い目に遭いたくないなら早く乗れ」

私がナイフを見つめて立っていると、男は刃先を私の頬に当てて、ゆっくり告げた。

「俺がキレる前に、車に乗れ」

私は仕方なく男に従う事にした。車の扉を開けて乗り込んだ。運転席に乗り込んだ男は乱暴に車を発進させた。私は怖くなりシートベルトを締めた。

「お前、何で俺と別れるわけ？」

男は苛立った様子で聞いてきた。

「あの、信じてもらえないと思うんですけど、私は“園中みゆき”って言います」

男はこちらを睨んだまま、じっと見つめていた。私は信用させるために保険証を男に見せた。

「ほら、ここにも私の名前が書いてありますよね？」

男は私の手から保険証を奪い取り、じっと見てからフロントガラスに投げ捨てた。

「で、別人だ、とか言うわけ？」

男はしばらく間をおいてから、私の両頬を掴んで助手席の扉側に

押しつけて怒鳴り始めた。

「お前ふざけるなよ！」

後頭部を助手席の窓ガラスに強く打ち付けた衝撃で、私は呆然としていた。

「電話しても出ない、メールも返さない、他人の振り、お前俺を馬鹿にしてるだろ？」

私が目頭を押さえて頭を振っていると、男はさらにいろいろと怒鳴り始めたが、私には聞くほどの余裕はなかった。男が怒鳴り続ける中で男の携帯が鳴った。

「なに、お前携帯鳴らしてるの？」

初めて男は驚いたような顔をして私と携帯を交互に見た。そして電話に出た。終始男は『ああ』としか答えてなかった。驚いた表情で私を見ながら、頷いていた。そして電話が終わると男は不安な顔で私に質問してきた。

「おまえ、だれ？」

男はようやく私が彼女ではないと知ると、困った表情で頭を押さえていた。そして何度も何度も謝罪していた。

「本当すいません、俺てつきり彼女だと思って、本当すいません」

先ほどの威圧的な態度から一変して、腰の低い感じに変わったのが、おかしかくて私は思わず笑った。

「間違いだと、わかってもらえたら良いんです」

「すいませんでした」

男は苦い顔で頭を下げた。

「あの……ひとつお願いして良いですか？」

私はひとつお願いして見ることにした。

「はい、自分で出来る事ならなんでも」

「彼女に……会わせて貰えませんか？」

それは、私に似た彼女“エリ”と会ってみる事だった。私の言葉に男はしばらく動きを止めた、そして快諾してくれた。

「はい、そんな事でよければ喜んで、いや俺も二人が並んでいるところ、見てみたいので」

男の車に乗ってしばらく走ると、海沿いの方面へと走り始めた。

男は茶色のマンションを指で示して言った。

「あのマンションです」

車を駐車場に止めて彼女のいる部屋へと向かった。男が呼び鈴を鳴らすとマンションの扉が開いた。出てきたのはいつも鏡で見ている自分だった。

「嘘」

「うそ」

お互い同じタイミングで同じ言葉を発した。彼女は私の顔を見てとても驚いた顔をしていた。恐らく私も同じ顔をしているのだろう。

「え、タカシ、この人誰？」

「いや、お前だと思って捕まえたなら、実はそっくりさんで間違えてさ、で、この人がお前に会いたいって」

「初めまして、私は“園中みゆき”と言います」

私が自己紹介すると、彼女も軽く頭を下げて名乗った。

「あ、どうも、自分は“北島えり”です」

二人を見ていた男、タカシは私達を見てひとこと。

「本当双子みたいに似ているな」

タカシはそう驚いたような感心したような顔で言った。

彼女の部屋で私は彼女と向かい会っていた。どこから見ても自分そっくりなのだ。しかし血縁関係もなく、ここまで似ているのだから一瞬両親を疑ったが、そう言う事では無いのだろう。彼女という語りあった。年は私の方が上であることや、好みが実は同じだったとか、細かいクセも似ている所があった。

こうして私はもう一人の自分と出会った。

世の中には5人自分に似た人がいる……という、そんな世の中で自分と似た人に会える確率はどれほどのものだろうか、私はいろいろと考えながら会社へと向かう電車内で、携帯の画面を開いて見た。そこには私と彼女が肩を組んで写っている。そして彼女のブログにも私と彼女肩を組んで写っている写真が載っていた。

タイトルは“双子”と書かれていたのを見て、私は小さく笑って私は携帯を閉じた。

(後書き)

本当にお読み頂きありがとうございました。

……うう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5108q/>

『双子似』 【掌編・文学】

2011年1月30日05時25分発行